



編集月旦 2016年1月号

「蜘蛛の糸」の犍陀多(かんだた)になるなかれ

「高齢者意識」については、多くの高齢者(65歳以上)は、定年が延びて年金が支給される「65歳から」と意識することはあっても、「人生90年」の幅で考えることはありませんでした。

☆『高齢社会対策大綱』(2011年・野田内閣改定)に明記された「人生65年」から「人生90年」へという唐突な25年の延伸と国民の意識とのズレこそがこの間の政治の側の対策不在であった証なのです。

★「長寿をすべての国民が喜びの中で迎え、高齢者が安心して暮らすことのできる社会」をめざした「高齢社会対策基本法」制定(1995年・村山内閣)、その対策指針である『高齢社会対策大綱』(1996年・橋本内閣)から20年になります。もし政治の側が「基本法」の趣意にそって「大綱」の指針を一年また一年たんねんに実践してきたなら、増えつづけてきた高齢者の意識と実人生は、「長寿を喜びの中で迎え、安心して暮らすことのできる社会」にむかって熟成した姿を実現していたと推察されます。今世紀の一年一相の時期を含めて、政治リーダーにはこぞって対策延滞の責任があるといえます。65歳の高齢期に達したあとも国の要請に応じられる「高齢者意識」は未熟でありせいぜい半熟のままなのです。これまで「現役長生」型の暮らし方を選択してきた人なら、「人生90年」時代を「やっと来たか」と遅すぎた要請を率直に受け入れられるでしょう。しかし「人生65年」での「引退余生」を意識して、けっこう長かった現役時代のトップギアからミドルあるいはロウにまでギア・チェンジしてしまった多数の人びとにとっては、「いまさら何を」の思いがあるにちがいません。

☆とはいえ、高齢者が3400万人、26%にまで達してなお増えつづける社会では、20年を越える「余生」に高いレベルの介護や医療を提供しつづけ、穏やかに終末を看取るという「社会保障」ができなくなることは、周辺を見、総体を考えれば、だれもが納得せざるをえないところです。そこで「自分だけはなんとか」と考える人が現われます。そのときから「格差」を認める思考過程に入ることになり、「温かな助け合い」の輪から抜け落ちることになるのに気づくことになります。

☆かつて大正七年に芥川龍之介が『赤い鳥』創刊号に書いた「蜘蛛の糸」の主人公、犍陀多の姿が思い出されます。お釈迦様のおいでになる極楽と対極の地獄というのは当時広がりつつあった「格差」の表現でしょう。極楽への一筋の糸にすがって「自分だけはなんとか」と考えたことで、犍陀多は助かることなく地獄へ落ちていきました。その後、芥川を襲い自死にいたらしめた「唯ぼんやりした不安」についてはここで論ずる場ではありませんが、その後の生きづらい時代を感性の鋭い芥川は予見していたことは確かです。

☆すべての高齢者が90歳まで生きられるわけもなく、願っても女性で半分、男性は5人にひとりですし、健康寿命は10年ほど短いことを考慮すれば、何がなんでもすべての人が「90歳・現役長生」の人生を前提にしてというのは酷な話ということになります。とって、みんながみんな「65歳・引退余生」人生を送りながら、「自分だけはなんとか」という思いで暮らすというのも罪な話です。酷でもなく罪でもない穏当な人生にならないものかというのが現代の犍陀多の悩みです。

★一人ひとりが長寿を喜べる「日本長寿社会」の達成とアジアに住むだれもが等しく豊かさを享受できる「アジアの共生」は、ふたつながら平和の証であり、高齢者の課題であり、本誌の目標です。(編集人記)

